木の葉に産まれたアウトサイダー

Riou

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
木の葉に産まれたアウトサイダー

【Ｎコード】
Ｎ４５３４Ｘ

【作者名】
Ｒｉｏｕ

【あらすじ】
これは英雄の物語ではない。

世界を《平和》へと導いた英雄。

彼は輪廻から外れた転生者であるアウトサイダー。

幾度もの転生を繰り返した彼は絶対的な力を持つ。

世界を救った英雄と、世界を憎むナルトが出会った結果なにが起こるのか。

お楽しみに。

※更新は不定期です。
また、構想を手伝っていただける方を募集します。
そして最後に、装甲悪鬼村正ファンの方、是非とも語り合いましょう！

プロローグ（前書き）

ゆっくりと完結目指してやっていきますので、よろしくお願いします。
あ、感想での絡みなど大歓迎ですので！

では早速。
ナルトのプロローグです。

プロローグ

尾獣。

それは人外の存在。

圧倒的な力を持ち、それは天災に近いものとされ、一度現れればあらゆる里は壊滅し、国を滅ぼすと言われている。

そんな尾獣の中でも頂点に君臨する九尾の狐が今、火の国、木の葉の里で暴れていた。

人々は懸命に抗うも天災とされる力に抗うこともできず命を散らす。

あらゆるものをその巨大な体で弾き飛ばし、あらゆるものを蹂躙するその姿はまさに、絶望の化身だった。

人々は力無く跪き、祈るほかなかった。

ただ二人の人間を除いて。

木の葉の里を救った英雄は、里の長たる忍者であった。

人でありながら人あらざる力を持ち、その頂点に君臨する火影の名を冠する者、波風ミナト。

そしてその妻たる才女、結界術において他の追従を許さず、夫であ

る火影を常に支えてきた朱き賢者、うずまきクシナ。

九尾は英雄とその妻の死とを引き換えに、一人の赤子へと封印された。

里には平和が訪れた。

しかしそれは、争う余裕もない、という意味での平和であった。

英雄の死は里の人々に悲しみを残し、それを招いた九尾への憎しみを抱かせた。

悲しむ対象である英雄の存在は今はなく、憎むべき対象は封印されたといえど赤子の中にいる。

それは、世の理であったのだろうか。

時は悲しみは薄れさせ、一方で憎しみを増幅させていった。

いつしか英雄の子は九尾と同一視され、迫害を受けることになった。

父も母もおらず、庇うものも誰一人いない世界で、既に少年となっていた赤子は世を恨んだ。

父を憎み、母を憎み、里を憎んだ。

石を投げられ、何度も殴られた顔は腫れあがっていた。

幾度も蹴られ、投げ飛ばされ、地へと叩き付けられた身体は赤黒く

染まっていた。

惨たらしい姿を晒す少年は血を吐きながらも掠れた声で呟くのだった。

『こんな世界、消えてしまえ…っ！』

と。

プロローグ（後書き）

次はオリ主のプロローグ

プロローグ2

転生者。

それは輪廻から外れた存在。

その大き過ぎる存在の力によって生まれ変わることを許されず弾かれた者、アウトサイダー。

輪廻から外されるほどの力を持ったその存在は、幾星霜の時をかけ、別世界へと生まれ変わる術を見付けだし、その世界へと転生した。

そして、何世紀もの間、その世界で転生を繰り返しいた彼は、嘆いていた。

何故、人々は争うことを止めないのだろうか。

と

彼は文明が滅びるほどの戦争を何度も見た。

その度に0からやり直し、彼は命を育んだ。

しかし人は、文明が進めど進まずとも争うことを止めなかった。

何度目の転生を終えた頃だろうか。

その時代には正義を振りかざし悪を裁く聖王国があった。

圧倒的な武力。

圧倒的な人員数。

それを以て聖王国は他の国家を侵略していった。

正義の名の下に。

それが聖王国の大義であった。

いつしか聖王国に仇なす者は悪とされ、人々は迫害を恐れ聖王国を崇めた。

世界は聖王国に統一され、平和な世界が訪れた。

しかしその平和の実態は、王族と貴族が富を独占し、平民から搾取し成り立つ弱者の犠牲による強者のみの平和だった。

弱肉強食。

それは幾度も続いてきた争いの歴史と変わらない理。

それが、世界の理なのだろうか。

そんな中、転生者は森に住んでいた。

幾度もの転生で学んだものは蓄積され続け、輪廻から弾かれるほどの存在の力を持つ彼はその力の扱い方を既に熟知していた。

世界に干渉し、強引に輪廻の輪へと潜り込むことを初めとし、あらゆる自然の力を操り、あらゆる事象へと干渉することを可能とした彼は、絶対的強者の視点から一つの思想へとたどり着いていた。

天下布武。

しかし彼のいう天下布武とは武によって世界を統一することを意味するものではない。

武は力。力は力である。そこに意味など存在しないという考えから生まれた思想である。

悪を絶つべしと剣を振るい、正義によって裁きを下す。

それを否と、彼は判断したのである。

彼は言う。

人を殺す、それすべて悪である。

と。

正義の剣であろうと悪の剣であろうと、それは人を斬るために存在している。

殺す為に、鋭く磨き上げられた刃が剣には付いている。
剣とはそういうものである。
武器とはそういうものである。
武力とは、人を殺す為の力である。
正義で人を殺せはしない。
武力が人を殺すのだ。
悪が人を殺すのではない。
武力が人を殺すのだ。

だから彼は決めたのである。
武の象徴として、圧倒的な武力でこの世界を…
この世界のすべての生命を等しく殺すことを。
それが彼の天下布武の内容であった。
世界で虐殺の限りを尽くす彼に対して、誰が呼んだかその名は武帝。
人々は今更に理解していた。

武というものの恐ろしさを。

それでも人々は武に縋った。

彼を殺すためにあらゆる手を尽くした。

武帝を究極の悪とし、聖王国は最大限に力を尽くした。

例え最後の一人になろうとも、我等が正義が必ず悪を絶つとして。

そして数年後、この世界にただ一人立っていたのは、武帝であった。

その顔は自嘲気味な笑みを浮かべ、双眼からは涙を流し、ほんの少し空を見上げていたが、彼は笑みを浮かべたまま自害した。

彼は英雄ではない。

あらゆる生命を滅ぼした大罪人である。

しかしどうだろうか。

彼はこの世界に平和を齎した。

争いのない世界を、創りだした。

どんな偉人であろうと誰も成し遂げることのできなかったそれを彼は成し遂げた。

それがたった一つの生命すら存在しない世界だとしても。

初めからそれを望んでいた訳ではなかったとしても。

…ならば彼を英雄と呼んでいいのかもしれない。

争いばかりだったこの世界に、永久的な平和を齎したのだから。

外道

月が夜空に輝き、火影の執事室を照らす頃、そこには二つの影があった。

『うちは一族の抹殺を実行する。』

苦しげにそう言い放ったのは、四代目亡き後、火影を代行している三代目火影だ。

顔の前で両手を組み、書類の散らばる机に肘を付いてもう一つの影に鋭い視線を向ける。

その眼光は、老いてなお火影に君臨しているだけのことはあり、歴戦の強者であることを感じさせる。

『うちは一族にクーデターを起こさせれば、木の葉は負けずとも大きな被害を被るであろう。そうなればそれを機に数多くの国から狙われ、最悪の場合、第三次忍界大戦が勃発しかねない。』

組んだ手を額に当て、苦悩しているのだろうか。

その表情は伺いしれない。

『イタチ、お前には辛い任務をさせることになる。儂を恨んでも構わん。いや…恨まれて当然であろう。だが、イタチ。お前ならばわかるはずだ。幼いながらにもあの大戦を、その眼で見てきたお前ならば。もう二度と、繰り返す訳にはいかんのじゃ…。写輪眼には写輪眼を。この任務は万華鏡写輪眼を得た今のお前にしかできぬ。頼んだぞ…イタチ。』

イタチと呼ばれた影は表情一つ変えず頷いた。

心の中の葛藤を押し殺し、感情を感じさせないよう仮面を被ったかのようなイタチはまさに忍と呼ぶに相応しい。

イタチはこれから人を殺める道具となり、忍として、機械のようにうちは一族を皆殺しにするだろう。

ただ一人を除いて…

『…火影様。最後に、お願いしたいことがあります。』

今まで揺らぐことのなかったイタチの表情に若干の翳りが現れる。

それを察した火影は一度、大きく頷いた。

『…サスケのことじゃな？』

その名を出され、一瞬ぴくりと身体を反応させたイタチは、片膝を付き、忠誠の体勢を取る。

『はい。サスケだけは、私には殺せません。ただ単に己が愛するが故だけではなく、サスケは私を越えうる才能を持っています。ですからなにとぞ、サスケだけは見逃していただきたい。私の身体は病に蝕まれそう長くも生きられません。サスケが生きることをっ…うちは一族の復興を、認めていただきたい！』

火影は悩むそぶりを見せる。

本来ならばクーデターを企んだ一族は、失敗すれば一人残らず殺される運命にある。
生き残りがいればまた同じようにクーデターを企むかもしれないのだから、当然であろう。

しかし、今回は少しばかり事情が違う。

一族の始末を、その一族の人間が行うという異例の事態。

それならば多少の不遇や監視はあれど、復興を認められないことはない。

『…わかった。お前がクーデターの阻止に成功した場合、サスケを保護し、一族の復興を認めよう。お前には本当にすまないと思っている。儂がもう数十年若ければ…』

『いえ…悪いのはクーデターを企てた我々うちは一族です。過去の栄光に縛られ、国を考えず、自らの利益のみを考えて行動する。そのような一族はこの火の国、木の葉の里にあってはならない。ですからせめて自分の手で。自分の一族の恥は私が…』

そこまで言ったイタチは、不意に言葉を止めた。
なにかに見られているような、そんな気配を感じ、部屋の隅へと視線を走らせる。

そして数瞬の後、イタチは驚愕のあまり部屋の出口まで飛び退いた。
反射的にクナイを投げ、印を組みなにがあってもいいように身体中にチャクラを走らせる。

突然のイタチの行動に火影である猿飛も驚き、イタチ同様出口へと飛び退き、イタチと並んだ。

イタチがクナイを投げた先にいたのは、なんとも陰鬱な空気を放ちながら、何故かまったく存在感を感じさせない男だった。

白髪に三白眼。歳は三十頃だろう。髪はだらしなく伸びておりボサボサだ。

そして刀を腰にぶら下げたその男に投げたクナイは真っ二つになり床に転がっている。

金属を切ったというのになに一つ音がしなかった。

それはこの男の技量を現していた。

外道2

『何者じゃ！』

三代目火影は思わず声をあげる。

有り得ないと、そう思うことを止めることができない。

ここにいるのは木の葉の里のトップに君臨する火影であり、プロフェッサーとまで呼ばれた猿飛と、木の葉の名家であるうちは一族の中でも実力でいえばトップの位置にいるイタチである。

その二人に気配すら感じさせずに出し抜くことなど、現実的に考えれば不可能だ。

だが、現実、今、猿飛の視界の中にいる男は存在している。

部屋の隅からこちらを窺いながらも、口元はにやりと笑みを浮かべている。

『ケケッ。くだらねぇなぁ…くだらねぇよあんたら。』

初めて口を開いたその男の言葉は、猿飛達への嘲りを存分に含んだものだった。

その言葉にイタチは反応する。自分をくだらないと発言したこの男に、生まれて何度目かの激情を覚える。

『今、なんと言った？くだらない、だと…？この木の葉の里の命運を…俺の一族の存亡を賭けたこの会合をくだらないだと！？貴様に何がわかるという！』

イタチは普段は見せない怒気を孕んだ表情で言葉を返す。

一族の存亡をかけた交渉中にいきなり現れ邪魔をされたあげく、その交渉を、くだらないと一蹴されたことが、緊張で余裕のないイタチに普段なら絶対に有り得ないことである感情の爆発で攻撃を仕掛けるという愚を犯させた。

影分身を一息の間に三体生み出したイタチは、一体は天井を足場に上から胴体へと突撃させ、残り二体を低く低く走らせクナイで右足と左足を斬りあげるように動かした。

そして本体であるイタチは写輪眼を使い、男の動きを見逃さないように見る。

上下からの攻撃を同時に対応することはかなりの技術が必要な上に、イタチの速度は一般の上忍を遥かに凌ぐ。それをどう捌くのか。それによってイタチがどう攻めるかも決まる。
イタチは男がこの攻撃を防げないとは思っていない。

そのイタチの予想は、当たる。
が、それは予想外でもあった。

上から胴体へと突撃してきた影分身は腹を蹴り飛ばされ、足に切りかかった影分身は踏み潰され消えた。

三白眼の男は、ただその場でバク宙をするようにクルリと回っただけで、三体の影分身を一瞬にして片付けてしまったのだ。

男はつまらなそうに首に手をやり斜め上を見ると、次の瞬間には、イタチの腹部から刀の切っ先が覗いていた。

『なっ…！』

三代目火影である猿飛は、あまりの事態に動けずにいた。

実力も経験もトップクラスであるが、それ故に、あまりに予想外な事態への対応が遅れてしまっていた。

あのイタチが軽くあしらわれる。それはとても信じられないことであるから。

そして、イタチが背後から腹を貫かれ窓際へと蹴り飛ばされてからやっと、猿飛はイタチのそばへと移動し庇うように三蔵との間に立った。

男は、血を飛ばして刀を納め、若干の怒りを見せながらイタチへ言う。

『くだらねぇよ。てめぇは。本当はやりたくねぇんだろ？なのに一族がどうとか戦争がどうとか理由付けやがってよぉ。ならやらなきゃいいじゃねぇか。そのくせ弟だけは助けてくれだぁ？笑わせんじ

ゃねぇよ。てめぇは森の奥に引きこもって霞でも食ってんのがお似合いだ。』

火影の後ろで倒れるイタチを見下ろし、イタチには言いたいことは言ったとばかりに視線を火影へと移す。

『さぁて、火影さん。はじめましてですかねぇ？あっしは三蔵。ちなみに法師じゃあございませんぜ？あぁ、イタチの野郎は殺しちゃいません。急所は外してやってますから、死にはしない。』

三白眼の男、三蔵は、さっきとは打って変わって軽口を叩きながらにやにやと笑みを浮かべて火影へと話しかける。

『…お前は、何者じゃ。』

最初とは違い慎重さを孕んだ問いに、三蔵は笑い声をあげる。

『ケケケッ。なぁに、別にあんたらを殺しに来たわけじゃぁない。そう気を張らねぇでくださいよ。まぁ、一つ、忠告をしとこうと思いましてね？』

三蔵の笑い声に不快そうな顔をするも、忠告という言葉にピクリと反応した猿飛は、その先を促すように目を細める。

『あっしは武帝という組織のもんです。この世界に天下布武を成す。それがあっしら武帝の目的でさぁ。あんたらへの忠告の内容は、死にたくなけりゃ三年以内に忍を辞めろ。それだけ。じゃ、確かに伝えましたぜ？』

そう言うと三蔵は身を翻し、ドアへと向かった。

『待て！どういうことじゃ！忍を辞めろと言われて辞められる訳があるまい！』

忍はもうこの世界では居て当たり前の存在であった。

忍がいることが前提で世の中は回っているのだ。

忍が消えた未来など想像もできない。

『言ったでしょう？死にたくなければ、と。辞めなきゃ死ぬだけだ。あっしら武帝が、あんたらを殺す。一人残らずなぁ。ケケケッ。』

それだけを言い残し、三蔵はドアの向こうへと消えた。

火影は混乱する頭の中でイタチの治療を優先するべきだと考え医療忍者を呼ぶ。

誰にも気付かれずに侵入し、おそらく誰にも気付かれずに出て行ったであろう三蔵という人間を、火影は心底警戒していた。

『時代が変わる時が、来たのかもしれん…』

そう呟き、火影の象徴である帽子を深く被った猿飛は、イタチへの応急措置を行う為にイタチの腹部に手を当て何度目になるのか、また驚愕する。

三蔵の刀は内臓を一切傷付けず、重要な血管、神経の合間を見事に

抜けていたのだ。

『……武帝…か。』

火影はその組織の名を零し、医療忍者が辿り着くまで、室内には重い沈黙が続いていた。

外道２（後書き）

三蔵のモデルになった人物、村正が好きな人はわかるかと（笑）

激動の時代へと（前書き）

ここから本編という感じです。
主人公登場！

激動の時代へと

ここはとある小さな無人島。

そこにはいつの間にか、城が立っていた。

城と言ってもそこまで大きい訳ではないが、小さな島に城があるというのはなんとも奇妙な光景であり、その異質さからかそれは存在感を増していた。

城があることからわかるように、かつて無人島であったこの場所に、今は人が住み着いている。

場所は城内に移り、玉座の間。

そこには三人の人影があった。

『影虎(かげとら)様。三蔵が戻ったそうです。』

そう言ったのは美しい妙齢の女性。

緑の髪を肩で揃え、猫のような目をしたその女性は、玉座に座っている男へと声を掛けた。

『そうか…。報告をさせる。鳴鈴(メイリン)、呼んでこい。』

低いがよく通るその声を発したのは玉座に座る黒髪の男。

後ろ髪を腰に届く程まで伸ばし、黒と紅の線が交錯するようなデザ

インの服を着ている。

鳴鈴が短い返事と共に出て行くと、影虎は玉座の横にいた小柄な男にも声を掛ける。

『葉。次はお前だ。お前には風の国、砂隠れの里に行ってもらう。伝える内容はわかっているな？場合によっては殺しても構わないが、出来る限り殺すな。まだ、時期ではない。』

影虎の指示に、葉はすぐさま『了解っ♪』とだけ返事をし、玉座の間から出ていく。

葉は白い布をポンチョのように羽織っており、影虎と同じく長い黒髪がその布に映えていた。

歳はまだ15にも満たない程度に見えるが、与えられた任務から察するに相当の実力を持つのであろう。

跳ねるように歩くその後ろ姿からは想像もできないが…

葉と入れ違いになるように鳴鈴と三蔵が入室し、再び玉座の間には三人が揃う。

『お久しぶりでさぁ影虎の旦那。任務は無事、終えてきましたぜ。ケケッ。』

三蔵が任務の完遂を告げると、鳴鈴が顔をしかめる。

鳴鈴は、この男があまり好きではなかった。

主であり、組織の長である影虎をあまり尊重しない三蔵は、影虎を

崇拝している鳴鈴にとって背信者のように映る。
隙あらば殺してやると思っていたが、影虎が部下にするだけあって実力は本物。文官である彼女には逆立ちしても勝てはしない。
まぁ、だからこそ隙あらば、なのだが。

鳴鈴が頭の中で三蔵を滅多刺しにしている中、三蔵と影虎の会話は進んでいた。

『ご苦労だったな、三蔵。さっそくだがまずは、誰も殺していないだろうな？』

三蔵は影虎の問いに小さく笑うと
『えぇ、誰も殺しちゃいませんよ。うちはイタチが攻撃して来たくらいで、他にはなんのトラブルもなかったですぜ？』

うちはイタチの名に少し眉を上げた影虎は、続けて問う。

『ほぅ…イタチもいたのか。クーデター阻止の打ち合わせでもしていたのか？』

木の葉の情報は、木の葉担当の密偵から流れてくる。

どんな極秘事項であろうと、組織である以上洩れないことはない。
もちろん、強引な手段を用いる場合もあるのだが。

『さすがは影虎の旦那だ。その通りで。なんで戦闘になったかを説明させてもらいやすが、うちはイタチの野郎は火影に頭下げて弟だ

けは見逃してくれとか言いやがりましてね？ついカチンと来ちまって、くだらねぇと言っちまったんですよ。そしたらあの野郎いきなり影分身まで使って攻撃してくるもんだから、つい刺しちまいました。まぁ致命傷は避けたものの、しばらくは使いもんにはならないと思いますぜ。』

三蔵の報告を聞き、少し考える素振りを見せた影虎は、玉座が立ち上がり歩き出した。

『どこに行かれるんで？ケケッ』

『うちはイタチ、うずまきナルト。両名を回収する。お前にはここの警備を任せる。あまり部下を虐めるなよ。』

そう言って影虎は鳴鈴から渡された外出用の黒いコートを羽織り、手を一度振る。
するとその手にはいつの間にか深紅の柄と鞘が鮮やかに映える長刀が握られており、一度手の中で回転させた後に腰に差された。

コートを払い、腰に長刀を差し、威風堂々と歩くその姿はまさしく武帝と呼ぶに相応しい存在感を示す。

そう、ここは武帝が本拠地、森羅城。

時代はここから、激動の時を迎える。

激動の時代へと（後書き）

葉のモデルは〇ャーマン〇ングの某プリンセス〇オです（笑）

プリンセス・ヘッドロック！とかネタ技を入れたい

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4534x/

木の葉に産まれたアウトサイダー

2011年10月21日02時04分発行